

佛学
始祖

村上英俊

上卷

Nagasaki University of Foreign Studies

瀧田貞治著

佛學
始祖
村上英俊

巖松堂古典部版

Nagasaki University of Foreign Studies

扉 題
簽

Nagasaki University of Foreign Studies

伯 爵
眞 田 幸 治 氏
文學博士
新 村 出 氏

Nagasaki University of Foreign Studies



村上英俊先生肖像

村上英俊先生肖像



村上英俊先生肖像

Nagasaki University of Foreign Studies

序

本傳記の編纂を意圖してからかれこれ十年の歳月を閲した。その間私の一身上に種々の變化が相續いて起き、倉皇としてゐた爲め、資性の懶墮はこれを奇貨として助長し、遂に幾度か本書の印行を斷念せしめるに至つたが、はしなくも本稿とりまとの内命を帝國學士院にうけ、昭和七年早春臺北の地に於て最後の稿を脱し、數年前の舊稿と共に帝國學士院に提出し、八年二月同院より傳記研究並びに出版として補助をうくる光榮に浴した。思へば、英俊先生落魄の頃、明治十五年、學士院の會員に選ばれて再び世に出で、その没後、日進月歩の世運は、漸く先生の遺業を棄て、かへり見まいとしつつある際、昭和の今日、先生の傳記印行が又々學士院の補助によつて成さるゝとは、何たる幸慶何たる偶然、うたゝ今昔の感にたへざるものがある。

本書の編纂については、大槻如電翁、加太邦憲氏、小松謙次郎氏、大平喜間多氏、羽田桂之進氏、村上秀太郎氏、吉野作造先生、新村出先生、上田萬年先生等斯界の泰斗先輩の示教を仰ぎし所多く、この公刊については、上田萬年先生、姊

崎正治先生、新村出先生の御骨折を忝うした事一再にとゞまらない。
尙本書の題簽は、伯爵眞田幸治氏、扉は新村博士の御染筆になつたものである。

右申述べた本書編纂刊行の全経緯は、英俊先生を永遠に飾ることなき記念であり、本書の貧しさを指うて餘りあることとて、私も、英俊先生の餘徳にかくれて、これら諸先生に心からなる感謝の意を捧げまつるものである。

昭和八年晩秋

臺北にて

著者 しるす

例言

一、本書收むる所大小七篇各々、獨立せる論章なるも、併せてはじめて村上英俊先生の全貌をうかゞひうるやう努めたり。

一、最初の「村上英俊」に彼の略歴を述べて所謂傳記となし、他はこれを補ふの資とせり。

一、著書解説は彼の著書全部を網羅し版本稿本逸書等に及べり。

一、英俊の遺せる論文雜稿多からず。文集には、茂亨漫筆と、著書の序跋、その他に、僅か遺存せる書簡を加へ、醫學血液に關する譯述論文は、彼の譯述著書の本文を收めざると同様の理由によりこれを捨てたり。

一、遺墨の知れる限りを蒐めて寫眞版とし特に一項を設けたり。

一、印譜は右遺墨等より丹念に拾收し實大に印刷せるものなり。

一、年譜は重複の嫌ひなきを得ざれども正確な事實を速かに知るに便せん爲め敢て編次して附加しぬ。

一、資料蒐集の由來は、昭和二年の交雜誌新舊時代に「村上英俊の傳記を編む

徑路」と題して掲げしものに朱を加へたるものなり。故に同年以後の村上英俊の資料蒐集顛末については何ら言及する所なし。

一、各項の見出しの文字は、英俊自記の各種各様の筆蹟を集字或は摸字せり。

一、本書の體裁は、英俊の多くの著書が美濃判三冊仕立、黄表紙なる外形を襲へるものなり。

以上

佛學始祖 村上英俊

總目錄

上卷

序
例言

一村上英俊

佐久山時代	自文化七年	一
江戸修學時代	自天保十二年	三
松代時代	自天保十二年	八
著作發表時代	自嘉永四年	一一
開成所時代	自慶應三年	一七
達理堂時代	自明治十年	二二
晚年時代	自明治三十年	二七

茂亭漫筆	六
詩及狂歌	一一
官有地拜借願書	一二
書簡集	一二

四 遺墨集	一六
-------	----

五 印譜	二二
------	----

六 年譜	二九
------	----

七 資料蒐集の由來	三一
-----------	----

後書

寫眞版目次

英俊先生肖像	上卷 卷頭
佐久山全景	四丁表
松代全景	十二丁裏

ベルセリウス肖像	十三丁裏
----------	------

開成學校全景	二十一丁表
--------	-------

達理堂門人名簿	二十三丁表
---------	-------

英俊翁唯一の孫久子氏	三十一丁表
------------	-------

學士會院會員當選狀	三十二丁裏
-----------	-------

先考碑	三十三丁表
-----	-------

レジヨンドヌール勳章	三十四丁表
------------	-------

村上英俊先生墓	三十八丁裏
---------	-------

三語便覽表紙	中卷 二丁表
--------	--------

全 見返	二丁裏
------	-----

全 奧附	三丁裏
------	-----

全 第一丁	六丁表
-------	-----

全 廣告	十丁表
------	-----

佛英訓辨表紙	十一丁表
--------	------

全 見返	十一丁表
------	------

五方通語表紙	十四丁表
--------	------



始祖 木 山 身 佛 經 目錄 三 葛 林 堂 書 房 古 典 部 版

五方通語	見返	中卷十四丁裏
全 第一丁		" 十六丁裏
佛語明要	表紙	" 二十丁表
全 奧附		" 二十一丁表
全 附錄	見返	" 二十一丁裏
佛語明要第一丁		" 二十三丁表
英語	箋	" 二十五丁表
M氏英和・和英語彙	扉	" 二十七丁裏
佛蘭西答屈智幾	表紙	" 二十八丁表
全 見返		" 二十八丁裏
西洋史記	全景	" 三十二丁表
全 見返		" 三十二丁裏
全 原稿		" 三十四丁表
三國會話	見返	" 三十六丁表
醫學論文	原稿	" 三十九丁裏
茂亭漫筆	第二丁表	下卷 七丁表

茂亭漫筆	第二丁表	下卷 八丁裏
奉帚平明金殿開		" 十七丁表
寫竹是傳神		" 十七丁裏
出師表		" 十八丁表
蘭亭記		" 十八丁裏
礪邊疎竹々邊身		" 十九丁表
鸚鵡前頭不敢言		" 十九丁裏
月落烏啼霜滿天		" 二十丁表
變扇斜分鳳幄開		" 二十丁裏
英俊說		" 二十一丁表
暖雲如粉草如茵		" 二十一丁裏

佛學 寸 上 花 受 總目錄 四 後公堂書古典部版

Nagasaki University of Foreign Studies

村上英俊

Nagasaki University of Foreign Studies

始祖 村上英俊
系目録
一
村上英俊
系目録
一
村上英俊
系目録
一

始祖	村上英俊	系目録	一
一	村上英俊	系目録	一
二	村上英俊	系目録	一
三	村上英俊	系目録	一
四	村上英俊	系目録	一
五	村上英俊	系目録	一
六	村上英俊	系目録	一
七	村上英俊	系目録	一
八	村上英俊	系目録	一
九	村上英俊	系目録	一
十	村上英俊	系目録	一
十一	村上英俊	系目録	一
十二	村上英俊	系目録	一
十三	村上英俊	系目録	一
十四	村上英俊	系目録	一
十五	村上英俊	系目録	一
十六	村上英俊	系目録	一
十七	村上英俊	系目録	一
十八	村上英俊	系目録	一
十九	村上英俊	系目録	一
二十	村上英俊	系目録	一

始祖 村上英俊 系目録
始祖 村上英俊 系目録
始祖 村上英俊 系目録

佛學 村上英俊 上卷

村上英俊 目次

佐久山時代 自文化八年
至文政七年 三

佐久山の姿—現在—明治四十年頃—幕末明治初期の繁華—文化年代—本陣佐野屋—その主人村上松園—境遇と人物—英俊の出生—教育と場所柄—父の功名心—葵の御紋章—松園佐久山を去るに付いての煩悶と決心—孟母三遷の教—英俊等佐久山に永別す

江戸修學時代 自文政七年
至天保十二年 八

京橋柳町に卜居—父の教訓—英俊の修學—漢學は東馬大野鏡湖に—醫は無涯足立長雋に—十六歳にして一夜に詩五十首を賦す—忠孝不兩全の説—蘭學は宇田川榕庵に—榕庵の學才—父松園の長逝—文政天保頃の蘭學界—足立長雋—宇田川榕庵—大槻玄澤—芳澤宗林—高野良齋—伊藤圭介—宇田川榛齋—中山成徳—杉田立卿—小關三英—高野長英—英俊の兄弟—妹心戒事チユ女—松代藩主真田幸良の妾—松代の魅力—先覺佐久間象山—英俊蘭學に通ず—化學書の耽讀—ベ氏曰く—松代行き

佛學 村上英俊 上卷

始祖 木村 一 身 堀 藤 屋 金 屋
始祖 村上 英 彦 上 卷 匠
總松堂書店古蝶部

それらは皆、恰もボロく、齒が抜け落ちるやうに根こそぎにされて行つた。屋根をめくる。束にして投げる。土けぶりの中から大きい眞黒な梁が悄然とその姿をあらはす。掛火の響、掛聲のうちに見るく崩れて、幾臺かの荷馬車に山と積まれた。そして馬の尻に白い一鞭を浴びせるや、勇ましい蹄の蹴立と共にゆるぎ出すのだ。左して青葉の隧道に没するもの、或は右して夕靄の中に消えることもあつた。そんな情景にはしばしば接した。そしてその度に、それ等に纏はる種々の挿話や傳説までもバラバラにされて行つたのである。ガラガラとした所に取り残された大きい礎石の上を走つたり、白い基石を拾つたりし乍も、一種の哀愁が胸を打つた。お祭りがあると大名行列が催される。花車が町を練る。そんな時その群に投じて、見物に來てゐる他町村の子供等の前でこれ見よがしに振舞つてゐ乍らも、立退いた家の跡に、青菜が五畝六畝ヒヨロ／＼と延びて、裏の竹藪越しに隣村が見すくやうになつてゐるのに氣付く時、遽かに花車を輓く力が溢つた。も一つ時代を溯つて、私達の父或は伯父の頃に立歸らう。その時代は幕末から明治初年につながりを持つてゐる頃である。當時の佐久山は實に

我々の想像も及ばない華やかな宿場であつた。奥州街道上の一要路に當つてゐた。常に參觀交代の南部、伊達、津輕、米澤等の諸藩がその途上こゝを宿とした許りではない。奥州に下るのにも宇都宮の次の宿泊所は佐久山に取らねばならなかつた。明け六つ鐘を宇都宮：早や氏家と喜連川、花の佐久山跡に見て、可愛いあの子に大田原、と道中唄に歌はれた當時の佐久山は股賑を極めたものであつた。佐久山の湯、泉林の八重櫻、八重に蓄んで九重に咲く。九重が十二一重に咲くならば、湯泉林は花で輝くと元氣よく歌はれた頃は活氣にみち／＼てゐた。縣令三島通庸氏の時に、舊態は改められてしまつたが、その昔、町の中央を貫く小川に添うた緑陰こまやかな柳や松の街路樹、更にそれに並行して走る二列の町並は、宿場氣分が横溢してゐた。懸行燈に書かれた屋號があり／＼と讀める。西側には、なすや、升本や、藤本や、中澤や、關や、近江や、塚田や、吉田屋、錢湯屋、大島や、川上屋、新富田巴や、澤や、新玉屋、柏や、富屋、東側には松のや、松屋、越後や、伊勢や、ゑびや、大玉屋、川野や、奈良や、岩野や、平野や、小島や、泉屋、喜久や、尾張屋、吉野屋等々々。枝垂る柳の相間にゆらめき渡る紅燈、それ等を縫ふ粉黛錦繡の美君、洩れ來る細

始祖 木下 一 美 徳 徳 録 録
始 祖 林 山 英 修 山 録 録
編 纂 齋 藤 正 房 著 録

は、素讀式の學問を父自ら教へたらうし、又寺子屋などにも通はしたに相違ない。然しこゝが子弟の教育に好個の場所とは考へられなかつたらう。儒者も醫者も名のある所謂學者はこの土地に住んでゐなかつた。これを思ふにつけても戀しいのは二十六里南の江戸であつた。遠いには遠い。然し毎日のやうに江戸から下るもの、江戸に上る旅人を目の前にまぎ／＼見てゐると、水盃をして上らなければならぬ程の所とも思はれない氣がしたりした。一方英俊は年一年と成長していつた。成長する白哲の美少年英俊を見るにつけ、父は我が子に代つて時々功名心に燃え立つ事があつた。奥州の諸大名の宿泊中何時も彼の心に映るものは徳川家の葵の紋章であつた。拜領の紋服を着用してゐるものもある。違棚には拜領の道具が飾つてあるといふ譯である。勳功によつて葵の紋章付の品物を拜領出来る程世に名譽な事はないのである。松園は心私かに羨望の念を禁ずる事が出来なかつた。これを目前に見る親としては當然の事である。自分も我が子の英俊を立派に教育して有數の國手となし、葵章の紋服を着用出来る位の者に仕上げなければならぬと心に決したりした。然し實際は

此の土地を離れなければならぬといふ所に一大難事があり、何時もそれでこの問題は挫折する。彼の煩悶の期間は相當長かつたらう。家内での相談がやつとまとまると親戚から親戚を説き伏せると近隣知人から何とか言つて來た事であつたらう。然し彼は決心する所があつた。成る程本陣といへば普通の宿屋稼業とも異なる。勿體ない事だが、貴人の警咳にも接する事が出来る本陣である。醫者である徳には、土地の方々にも尊敬されてゐる。自分も亦住み馴れた平和な佐久山を愛してゐる。先祖の墓もこゝにある。然も自分はこゝを去らなければならぬのだ。親戚知人の切なる諫告もあつた。近隣からも、生馬の目を抜く恐ろしい江戸へだけは行かぬやうにとの親切な注意も受けてゐる。第一先祖の位牌に申譯がない事もよく知つてゐる。だからこそ長い間迷つた。手筈は運ばせ乍ら心にきめ兼ねてゐた。朝の決心は夕に既に形を失つてゐる場合が多い。なまなか決心がつけば夜の枕を濡すといふ譯。去らないうちにもう後髪を引くではないか。春に夢見る温泉の櫻、夏に涼味萬斛の箒の流れ、秋に燃え立つ紅葉の御殿山、冬に火の山那須の雪、これ等がこゝを去つても、何時も

妄執となつて自分達につきまといふのではあるまいかとさへ思ふのだ。事實去るのはつらい。然し子世の教育をどうする。孟母は子教の爲めに三遷したといふではないか。郷土に戀々としてゐる事が必ずしも故郷を愛する所以でも、國家に忠なる所以でもない。自分の決心はもう動かない。現在の家も全部を舉げて譲り渡す相談が出来てゐる。さうだ。自分は目をつぶつても斷然こゝを引揚げなければならぬのだ……彼の決心は蓋し右の如き千思萬慮の末に成つた事であつたらう。

當時本陣の如き御傳馬屋敷を廢絶せしむる事は一種の法度になつてゐた。即ち松園は先づ本陣を己が親戚で、佐久山近郷小川梅ぞに住む某を全家養子として迎へこゝを譲る事に相談がまとまつた。扱て松園が愈々一家を携へ、生れ故郷佐久山に永の別離を告げ江戸に向けて發足したのは文政七年松園四十二歳英俊十四歳の時であつた。

二 江戸修學時代

自 文政七年
至 天保十二年

江戸は京橋柳町に居を定めた松園、勿論醫を以つて一家を支へた。例へば彼の醫としての位置は、廣い江戸では、鶏頭を轉じて牛後としたに等しい。従つて田舎出の一介の藪醫を以つて目されたらう。それは兎も角江戸に移つた當初の一家は、故郷思慕に時の經つのを忘れた事であつたらう。想像も及ばなかつた江戸の賑やかさを見ては佐久山のお祭がすぐに頭に浮んだ事であらう。そして十四歳の英俊は沈み、父はこれをやさしくいたはつた事であらう。父はこゝでも、住み馴れた故郷佐久山を跡にした理由と覺悟を語つて聞かしたであらう。我が子をその友達から引離して來たこゝ、わけが話されたらう。烈女傳の孟母もその引合ひに出されたらう。佐久山を立つ時町の人達のいつた、貞介さん偉くなつておいて「立派に出世して、これらあり來りの告別の辭は、彼等の眞心と情熱とに彩色られて、將來成すあらんとしして門出する英俊父子をして最高の亢奮にまで押高めたであ

始祖 木 山 英 修 糸 目 録
始 祖 木 山 英 修 糸 目 録
始 祖 木 山 英 修 糸 目 録
始 祖 木 山 英 修 糸 目 録

幸良の父幸貫侯に早く認められその信任も厚かつた。松代に行けば象山との提携も出来る。然し彼は直ちに學問の地江戸を去らうとはしなかつた。それは父の喪を去る事遠からざることゝ免も角も、學業未だ半ばなるにこの地を離れる事は學業の自滅、これ父の教へに悖るの最たるものであつた筈。尤も象山とは彼が松代に行く以前既に交游が出来てゐたかも知れなかつた。何となれば象山は早く幸貫侯によつて江戸に留學を命ぜられて天保四年冬より江戸に在住してゐるから、幸貫侯の令息幸良侯の妾の兄であり且つ蘭學を修めてゐる英俊を同氣相求めて訪問し且つ敬意を表してゐたかも知れないのである。

英俊は松代行きへの代り醫學に専念した。蘭學に精根を打込んだ。松代行きへの前提かも知れなかつた。幸良の義兄として恥かしからざる名國手となる意氣を持つてゐたかも知れない。自分と同年なる象山の蘭學が、英俊の腦裏に往來しなかつたとも限るまい。烏兔忽々時は流れる。英俊の學識は高まる。一人立ちの出来る醫師として立派な見識と技倆を持つに至つた。蘭學も樂々と通讀出来るやうになる。かうなると彼は長崎を通

じて輸入される蘭書殊に化學の書籍を耽讀するやうになつた。所がこの研學中に不思議な事には、蘭書中に、べ氏曰くといふやうな記事が實に度々出て來るのである。勿論そのべ氏の學説はそこでは最高權威のもとして何時も君臨してゐた。英俊は早くも、べ氏が偉大なる化學者である事を知りこれに私淑の心が湧いてゐた。天保十二年英俊は三十一歳にしてはじめて松代行きを決行したのである。

三 松代時代
自 天保十二年
至 嘉永四年

彼は十四歳にして生れ故郷を離れ、居をうつして十數年、三十一にして再び學問の郷里江戸に別れて遠く信州松代の人となつたのである。松代の人々は此の新來の客に敬意を表すると同時に、又少なからず好奇の眼を見張つた事だらう。松代に行つた英俊は何をしたか。彼は最新の醫術を携へてゐた。即ち彼は醫を業としたのであつた。松代藩を背景にし、横文字の書籍を繙き、刀圭に Hulmannel (醫藥) を盛つた彼のこゝでの生活、得意であ

始祖 木村 山 功 俊 山 從
 始祖 木村 山 功 俊 山 從
 始祖 木村 山 功 俊 山 從
 始祖 木村 山 功 俊 山 從



Nagasaki University of Foreign Studies

つたらうその姿が眼前に彷彿とする。象山との交りも具體的に開けた。弘化元年には御切米を頂戴して松代藩に仕官の身となつた。嘉永三年の文書であるが、次ぎの如き記事が注意される。

村上英俊

其方妹心戒事 若殿様御産母に付家苗字永打續有之候様曩に被召出御切米金四兩上一人下二人半御扶持被下置仍醫師被仰付候

(真田家文書監察日記)

彼は既に化學の諸書によつてべ氏の著書ある事を知つてゐた。然らばべ氏の本體は誰れか。近代化學の祖といはるゝ別爾攝律私 J. J. Berzelius (1779—1848) 即ちそれである。彼は一千七百七十九年スエーデンに生れた。はじめ醫を學び兼ねて化學をも學修してゐたが遂に化學を専攻するに至つたのである。一千八百四年ストックホルム醫學校の教授となり、十八年には學術上に功勞ありし故を以つて貴族に列せられ、更に三十二年佛國學士院 (l'Institut de France) の會員に選ばれた。此の年べ氏は教授の職を辭し爾後一身を擧げて化學の實驗に従事したのである。彼は誠に現代化學の基礎を築いた學者で、世人彼を十九世紀第一等の分析家と尊敬した。彼の

佛學 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

始祖 木下 尚江 著 化學 卷 十三
 始祖 木下 尚江 著 化學 卷 十三
 始祖 木下 尚江 著 化學 卷 十三
 始祖 木下 尚江 著 化學 卷 十三



Jöns Jakob Berzelius.

著書中最も有名なのは *Traité de Chimie* (Lareboki Kemien) 一八八〇年より一八八八年の間に、ストックホルムに於て版行された。此の書は斯界の最高權威として獨逸語に、或は佛蘭西語に譯述された。特に當時佛蘭西の化學は歐洲の先進國の觀があつたので、競うてこれが佛譯を試む者が多かつた。A. J. L. Jourdan の譯書は一八二九—一八三三に亘つて Paris から B. Valerius のは一八三八—一八三九に Bruxelles に於て刊行された。又 Esslinger と Hoefler の二氏は、べ氏の贊助に依つて一八四〇—一八四一に翻譯を了して刊行したのである。

英俊はべ氏の化學書について瞬時も忘れる事が出来ずゐた。そしてこれが繙讀についておぼれけな望をかけてゐたのである。所が當時象山は海防に關して夙に憂ふ所があり、天保十三年には松代侯に「佐久間修理書上」なる書を捧呈した。砲臺を築く事や大砲數千門を鑄造すべき事等がその重大項目をなしてゐる。自然彼が火藥の智識を得る事に焦慮してゐた事は火を見るよりも明かな事であつた。火藥製造の要は焦眉の急に迫つて來てゐた。象山は、新武器を運用する新火藥の製造は、よろしく英俊と

謀つて、蘭書中よりこれを見出すに如くはないと思つて、早速彼を訪うたのである。英俊の頭に咄嗟に浮かんだのは例のべ氏化学書である。現在これ以上に出る化学書は一寸あるまい。諸書の引用文中に見ゆるべ氏の卓見には何時も敬服せられてゐるのだ。彼は言下に本書を推した。即ち彼は象山と謀つて長崎在住の蘭人の手を経てこれを海外に購入するの手續を取つた。待つ事一年有半にして同書は無事百五十兩の大金を投じ、千秋の思ひせる英俊の手に歸する事になつた。所が繙書一番驚いたのは、彼の蘭學の智識を以つてしては一語もこれを讀解する事が出来ない事だ。蘭文とは似而非なる佛文の故に。後の祭となつた迂を悔いた。蘭書を取寄せるとは一年半の歲月と大金を徒費しなければならぬのである。(尤も例へ注文したとしても、同書の蘭譯化学書は刊行されてゐなかつた。) 英俊は大いに迷つた。而もこれに名案を與へたのは當時奈翁に心酔し、佛國に傾倒してゐた象山その人であつた。名案とは何か、佛文習讀即ちそれである。英俊は象山の勧めに心が動いた。佛學創始の名譽を荷ふべく決心したのである。佛蘭西文典に就いたのが嘉永元年五月であつた。十月の交や、

佛文典に通じた。然もベルサリウスの化学書は一行も訓ずる事が出来ない。彼は蘭學まがひの現在の語學智識では、如何ともな才能はざるを知るや、はじめて、根本的に佛語學習を發起したのである。幸ひ藩の架藏中に蘭佛對譯字書が一部あつた。これについてイロハのイの字から勉強だ。彼のなした第一の仕事はこの字書の筆寫であつた。細字の字書を第一頁のaから毛筆を以て寫すのである。打ち込む精根も盡きた。盡きても彼は倦まなかつた。然しとう／＼負けた。よさうと思つた。よす事にした。その瞬間今は亡き慈父の言葉が彼の頭腦に電光の如く閃いた。彼は恐れ、慄き、詫び乍ら今捨てた筆をひそかに執つた。然しだ。依然として問ふべき師はない。質すべき友もない。曠野獨歩の彼は孤獨と寂寞と飢餓の苦痛にたへかねた。廢止、自慰、鬱打ちの生活を繰返した。彼の眼はその頃からよくかすむ事があつた。齒痛が腦をガン／＼させる事も昨今多い。これ等の難苦をつぶさに嘗め、寢食を忘れ、ひとへに研鑽する事十有六ヶ月、はじめて彼に佛學の光りゆるやかに輝き出したのである。嘉永二三年の交である。

かくの如くにして、英俊は、師授をまたず、全く獨力を以つて佛蘭西語に通達する事が出来た。彼が今後啓蒙期に於ける佛蘭西學者としての大きい役割を演じて行くのは言を俟たないが、この化學の名著を日本に於て讀破せる者の第一人者であつたといふ事が、實に象山に火藥の製法を授け、弘化元年始めて鍍錫の術を世に紹介したのみに止らず、彼が亦我が化學界に於ける指導的地位を保ち、常に幾多の發見發明を爲して、從來の蘭學流の化學者をして、しりへに撞着せしめる所以ともなるのである。

既に嘉永三年の眞田家文書監察日記を抄出したが、英俊が松代へ行つた天保十二年よりすれば十年自である。この十年間全く野にあつて醫を業とした事が、一見むしろ不思議に考へられる。何故侍醫官とならなかつたのであらうか。これは即ち英俊の學者的態度を示すものである。眞田家からは再三これの交渉があつた。然し英俊にして見れば、居に安んずる事が如何に自分の學問を退嬰せしめるかが恐ろしいのだ。自分が遂に松代下りをした事が、社會的の膺心などと混同されたら大きな迷惑で、刀圭を執りつゝ、學究をする事にあるのだ。言はゞ醫學と醫術を兼ね修める事にそ

の目的があつたのだ。彼の抱負は一國の主の侍醫位で満足する程チツボケなものではない。彼の氣概は、何時か「不屈王侯不侮民」の詩を賦した事もあつた位である。だから眞田家よりの懇望も彼は見事に辭退した。眞田家では動かすべからざる彼の決心を見て、氣樂勤めといふ所に覺が付いてゐたのである。嘉永三年の文書はそれである。尤もそれにしてもこの文書は少し遅すぎる。恐らくこの裏面には次ぎのやうな事情が介在してゐたらう。即ち英俊の素振りには屢々江戸に戀々たる所が見える。彼の學問が進めば進む程、江戸生活を思ふ事が露骨になつたので、仰々しい文書を發して彼の江戸行きを暗に阻止したのであらう。

それはともあれ、英俊の松代生活十年は、將に雄飛せんとする前の雌伏の形であつたともいへよう。彼のこの間に於ける收穫は、象山との交遊と、それに附隨して佛學修得といふ大事業であつた。嘉永三年は彼が四十歳の時である。具さに苦楚を嘗めたその功空しからず、今や彼は佛蘭西語修得の第一人者となつた。例へば、期する所あつて江戸よりその姿を暗まし、信州の一角にあつて私かに武器を研磨してゐたのだとも見られる。準備時

代の松代生活はそれ丈けて十分の意義があつた。然し今となつて見れば、松代はも早や彼の舞臺にはなり得ないのである。彼は江戸行きを願つたであつたらう。英俊の志を諒とした眞田家では、文書の出た翌嘉永四年一月十一日を以つて英俊を定府の身となしたのである。かくして彼は松代を跡にして再び江戸の地へあこがれ行くのであつた。

彼の松代生活に就いて言はなければならぬもう一つの事は、彼の妻帯である。越後高田藩下の鈴木カ子女を娶つた。その素性家系についての調査は今遽かによくする所ではないが、高田藩は眞田藩とは近接の土地にあり、且つ高田藩鈴木某の女とあれば、然るべき家柄より迎へた事は分る。然し結婚の年代に就いては何等の明記がない。英俊とカ子女との間には一子榮太郎を儲けたのみであつた。榮太郎は嘉永四年辛亥七月の生れてある。故に英俊の結婚は嘉永三年以前といふ事だけは明かな譯である。

而し英俊の松代發足の年月は、定府となつた一月十一日を、さして後れてはぬまいから、一子榮太郎は、英俊夫妻が江戸に落ちついてから生れたものと見るのが至當であらう。たゞ英俊の母、松園の室チカ女についての消息

は傳はらないが、樋口雪湖氏の先考の日記より、文久三年の存在を證しうる。兎まれ英俊は嘉永四年妻カ子を伴つて江戸に乗込んだ。英俊去つた松代は亦淋しかつた。十年間とはいへ、過ぎ去れば一昔、全く彗星の如き出現であり、彗星の如き退没であつた。山國でこそあれ當時進取的であつた松代、そこには語るべき知友も相當多かつた。象山は論を俟たない。松代藩儒畏堂小林至静や、郡奉行常山山寺源太夫等その交游のよろしきものであつたらう。常山は鎌原重賢の門を出て、佐久間象山とは同門である。特に常山との交游は尋常一様のものではなかつた。今に残る彼の書簡にして、常山宛てならざるものは殆どないのに徴してもそれがよく分るし、その内容を檢しても、彼の心を語り得る唯一の人であつたらしい。勿論英俊が江戸に去つても松代との交通は書信の上に絶えてゐなく、松代は、英俊に取つて一生感謝すべき土地として彼の腦裏に深く刻まれてゐたのである。

英俊は流星の如く長い尾を引き乍ら遠く江戸に去つてしまつた。……そしてそのなき跡、村上屋敷を覗いて見れば、そこには鐵砲鍛冶の片井氏が住み込んで、鑪に火花を散らし、天井を煤黒くさせてゐる。

始祖 木 一 身 修 一 卷 十一
 始祖 木 一 身 修 一 卷 十一
 始祖 木 一 身 修 一 卷 十一
 始祖 木 一 身 修 一 卷 十一

四 著作發表所時代 自嘉永四年 至慶應三年

江戸在住の定府の身となつた英俊は、深川小松町にある松代藩邸の一部に寓居する事になつた。この七月に一子榮太郎は生れたのである。四十一歳にしてはじめて子を思ふ親となつた英俊、彼の家は俄かに賑はつた。家庭的に缺くる所のものは何もない。遅かつたが一子は而も男兒である。自分の仕事有成しとげられるのは愈々これからだ。彼は微笑の中に孜孜として佛學の研究をつけた。そして己の學が進むにつれて彼が感じた遺憾は、蘭書を読む者は世に多い、英語を解する者も尠くはない、然し佛蘭西語を讀解するものに至つては天下廣しと雖も一人もゐない。四邊しきりに騒しいこの頃、佛蘭西語こそ世界の尖鋭佛蘭西を知る屈強の鍵だのにと、いふ事であつた。彼は乃ち後進に洋學を博むる爲めの一助にもと、字書の編輯を思ひ立つたのである。且つは、彼が恰も青天の霹靂の如く、彼の佛蘭西學をはじめて世に問ふ第一聲にもしたいと念じた。然しその字書の編

校正中に書信を寄せて再版本實在すと報ずる者あり。果して然らば、下巻巻尾に追記して本推論の誤りを正す所あるべし。

纂には如何なる態度方針を持すべきかも問題であつたらう。彼は先づ初學者の便を計り、かつ蘭英を讀む者の爲めを考へて、三ヶ國語の對照字典に思ひ付いた。そしてこれに總假名の讀みを施して發音を知らしめた。これが即ち佛・英・蘭の「三語便覽」三冊である。岩陰鹽谷世弘と松代藩儒小林至靜の序を以て巻頭を飾つた。嘉永七年の序文があるから同年の刊行と見てよい。この書一度世に出て世人を驚かしたこと如何程であつたか。就いて佛學獨修をなす徒輩もあつた。世界に君臨する如き佛蘭西を知るよすがとしようとしたものもあつた。佛學者、村上英俊の名は突如として高く響き渡つた。然し、この書は、三冊を以つて完成を告げたのではなかつた。勿論胸中に續篇編輯の案は立つてゐた。だから後篇三冊近刻の豫告をもしたのである。然し、ついにその編纂刊行を見なかつた。尙本書は再版の際、蘭を改め獨としたといはれてゐるが、果して然るやを斷じ難い。寡聞淺見再版本を寓目してゐない故の想察ではあるが、蘭を改めて獨となしたといふ一件は、英俊の時勢を見るの明に服するのであるが、後篇の續刊されてゐない所より推しても、それは全く英俊翁の腹案のみに終つたもので

やうに思はれる。この間、彼は寸暇を惜んで著述に力を致し、佛蘭西詞林の増補を怠らなかつた。安政五年彼の自記によれば三千二百枚のものとなつたのである。或る記録には五千葉の辭書となつたともある。元治元年この事業は完成して、佛語明要四冊の大著となつて世に問はるゝ運びとなつた。本著こそ全く彼の從來の字書の編纂の域を脱して泰西風となつた。左開き横書きABC引きである。その語數の豊富なる事、その體裁の整頓されてゐる點正に空前の大出版であつた。英俊生涯の精根と業績は凝つて佛語明要到要約されといつても敢て過言ではない。これが版下は書生を督勵し英俊又自ら鴉ペンを執つて書記したのである。此の出版に當つた書肆は從來のそれの如く須原屋、山城屋であつたが、出版費に就いて問題が起つた。幸ひ門人上原塙一郎が資金を投じた爲めにこの日本最初の佛和字典ともいふべき大著名作も滞りなく刊行されたのである。又この間に佛國兵法家的「樓那限」(Ternaye)の著 *Traité de Tactique* をも讀んだ。それは、文久三年江戸の三兵士官學校に佛國教師が聘せられ、日本に於ける兵制が具體化して佛國式兵法となつたのに刺戟されたのであらう。該書

を譯述して「佛蘭西答屈智叢」とし慶應三年に出版の許可を得、明治初年には店頭に出たのである。

これ等多くの勞作を逐次發表するかたはら、化學の研究も怠つてはゐなかつた。安政年間の彼のこの方面の收穫は、樟腦を精製して、恰も舶來蘭製の龍腦の如く無色透明にして梅花片に結晶したものを創製する事業が完成した事、苦心研究を重ねた結果、氷砂糖の製造法を知つた事の二つである。殊に後者には一つの逸話が傳へられてゐる。彼が師事した蘭學醫者宇田川榕庵は早くから舶載の氷砂糖を見て多年これが製造を試みた。然しそれは何時も失敗にのみ終つた。或時は成功するかに見えて僅かに二三分の角晶を結ぶに過ぎなかつたのである。榕庵はこの成功を見ずして弘化三年四十九歳を以て歿してつた。後年、英俊は、見事にこれが製造に功を奏して、宇田川未亡人にその結晶大なるものを示したる時、彼女はいたく歎稱し、夫君生前の苦心を細々と語られたといふ。此の先師の業を承けて、門弟英俊が成就した事も奇であるし、先師は和蘭流化學であり、門弟の學系が佛蘭西流化學であつた對照亦妙と言はなければならぬ。猶彼は爆裂藥

易に推察が出来る。この名簿は美濃判紙を二つ折にして綴ぢ、表裏に二名づゝ都合一葉四名の割合であるが、前後二ヶ所前に十四葉、後に十九葉合計三十三葉が綴目より切斷されてゐる。その何者の、何故の所爲かを解するに苦しむが、何れにしても門弟の數は更に増すであらうし、この種の名簿は他に一二冊が藏されてゐたとも傳へられてゐる。門弟中最も早く參じたのは中江兆民居士等であつたらう。木札には榎本武揚もあつた。名簿からは林正十郎、小林鼎助、井上修理、駒留良藏、松平太郎、濱尾新、加太邦憲、磯部四郎、その他名簿外に黒川清一、榑塚省吾等知名の士を多く數へる事が出来る。尙この名簿の興味ある點は、破門を宣告されてゐる者の多い事、それ等は姓名の上に破門と明記されてゐる。林正十郎等その例である。然し破門といふ事實の裏には、この破門に價する行爲をなさしめた時代の進運といふものが暗示されてゐるやうで、そゝろに「先覺者の悲惨な末路」といつた心境に涙なき能はざるものがある。

こゝでの講義は勿論佛蘭西語であつた。そしてその講讀には佛語で書かれた西洋史も讀まれたらしい。又或る時は彼の得意とする化學の講釋

を一週一度生徒全體に行ふ事にした事もあつた。これは生徒の希望によつたのではなく、英俊の自發に出たものである。然し高遠なセイミも塾生に取つては猫に小判の類ひで、生徒は寧ろこれを有りがた迷惑に思つた。一度は好奇に驅られ、二度目は引ずられて出たが、三度目には、女中が生徒の召集に来る有様だつた。がそれでも行く人は殆どなかつたといふ。先生もむづかしいから却つて迷惑だらうと言つて爾來その講釋は撤回したといふやうな事もあつた。英俊の門弟に對する誠に慈父の赤子に於けるが如く豊かなる温情と家庭的愛とを以つてし、只々學を樂しむの風があつた。初春の開講と冬至には必ず門下生を集め醺を張つて饗應するのを常とした。或は櫻花爛漫の墨堤に遊び臥龍を訪ひ、その歸途は料亭で馳走をし其の樂しみを俱にした。又門下生に病ある者あれば深夜と雖も診てこれに投藥する如き事は珍しくなかつた。こんな譯であるから、書生より月謝を多く取るといふやうな事は勿論ない。明治六年四月印行の「諸學費便覽」によると、入門に際して通學生二分(五十錢)入塾一兩一分、月謝一分、月俸一兩三分といふ定めになつてゐるが、事實は益と暮れの二度に二分づゝと、